

Gの政治考



Gの政治考は
公式サイトで更新中です。
<http://gaun-yoshinao.com/>



2018.1.28

野中広務という人

含羞の人だった。70歳を過ぎて、権力の階段を一気に駆け上がっていた4年間、この点だけは変わらなかった。だからこそ、愛想に欠ける信州人の僕でも、最初から受け入れてもらえたように思う。

家族想いの人だった。定期的に届く娘さんからの手紙を、一番大切にしていた。ときどき照れ臭そうに見せてくれた。どんな政治家の発言やマスコミの批判よりも、娘さんの言葉を重く真摯に受け止めていた。

正直な人だった。議員宿舎の部屋で「Nステーション」を観ながら行っていた懇談で、記者が核心を突く質問を投げかけると、NOの場合は「そうすか」、YESの場合は「・・・」というのが、定番だった。

変幻自在な人だった。政治は夜に動く。夜聞いた話が翌朝真逆の結論になっていたことが少なくなかった。だから、官房長官時代は毎晩、あの人が風呂に入って寝る直前に電話して話をすることを日課とした。

肉が好きな人だった。魚を綺麗に食べないことで母親に叩か

れたという思い出を度々話していた。だからではないだろうが、70を超す人がよくこれだけと思うほどペロリとステーキを平らげる健康家だった。

酒を飲まない人だった。30代の町長時代、職員が公金を酒代に横領した事件のけじめを示すために酒を止め、以来飲まなくなったということだった。宴席では、専ら、お湯のレモン割りをちびちび飲んでた。

記者を尊重する人だった。京都府政時代に野党を長く経験したせいか、社会における反権力の役割に理解があった。そして、報道各社の経営幹部より若い担当記者を優先することを、常に意識して対応していた。

直言居士を貫く人だった。どんな相手に対しても、良いものは良い、悪いものは悪い、と言うことが信条だった。必然的にこちらも、「あんたは、どう思う」と聞かれて答えられるかどうか、日々勝負だった。

差別を胸に刻み続けた人だった。被差別部落と言われる地域の育ちであることを、政治経歴の節目で公言した。同時に、そのことが未だ、自分の家族

や同様の境遇にある人たちに影を落とすことに心を痛めていた。

政治を天職とした人だった。突き詰めれば、どんな境遇に生まれ育ってもチャンスが平等に開かれている社会を目指していた。そして、そのためにあらゆる手段を尽くすことが政治だ、と考えていたように思う。



政界を引退して15年、野中さんが亡くなられたという訃報に接し、番記者として多くの時間を共にした頃を心静かに振り返っています。自らも政治家を志す者として、生前の野中さんの言葉に心耳を澄まし、未来へ進む原動力にしたいと思います。そして、いつかは、政治家・野中広務の評伝を書き記すことができればと思っています。

2018
4
vol.7

Lの視点で、Gの時代を穿つ

G通信

臥雲義尚 × リポート

臥雲は日々何を考え、活動しているのか。その横顔と頭の中を覗けるニュースレターです。

時代の先端へ、衆知を集める

23歳でアメリカへ渡った大谷翔平が、前代未聞の「二刀流」を貫いて、世界に衝撃を与えています。岩手県で生まれて、岩手県の学校に通い、岩手県の指導者に鍛えられた規格外の野球少年が、高校時代に描いた「未来予想図」に、<58歳で岩手に帰り、リトルリーグの監督になる>と記していることは、地方都市で生きる人たちに希望を与えてくれます。

松本は、冬の凍てつく寒さが和らぐ3月半ばから、街中を行き交う人やクルマが一気に増えます。暖かいというだけで人の気持ちが前向きになり、人の動きが活発になることを実感します。政治の役割も、そのようなものではないでしょうか。不確実な時代だからこそ、できる限り前向きな展望や構想を示すことが、人口が減っていく地方都市ではとりわけ求められていると思います。

松本市では、再来年2020年に4期16年続いた市政の大きな区切りを迎えます。そして今、その区切りを跨ぐような形で、4つの大きな事業の計画が進められています。①市立病院の建設、②市立博物館の建設、③新市庁舎の建設、それに④中核市への移行です。3つの施設はどれも100億円を超す事業規模であり、中核市移行に必要な市立保健所の

新設にも相当額の財政負担が必要になると見込まれています。

人口減少局面に入り、否応なく中央政府に依存できなくなる地方自治体は、住民の福祉を支える税収を最大化するために、いかなる「投資」が都市経済を最大限強くするかを考えなければならない時代を迎えています。もちろん松本市も、例外ではありません。2020年を前に駆け込み的に計画が進められている公共事業には、将来有益な果実を生むか否かという投資に不可欠な視点がどこまで盛り込まれているのか、市民を挙げてしっかり精査する必要があると考えます。

松本のポテンシャルの高さは、内外が認める所です。けれども、ポテンシャルが高いという地点で立ち止まっていたのでは、未来にわたって松本で暮らしたいと考える若い人たちにとって、それほど意味はありません。人の往来と賑わいを生み出す基盤となる「交通」を再構築し、世界基準の資源に恵まれた「観光」を軸に産業の裾野を広げ、誰もが個性や興味に応じて質の高い「教育」を受けられる仕組みを創ること。新たな時代の先端を目指して、松本の衆知を集めたいと思います。

政治資金に関する御礼とご報告

臥雲義尚の日頃の政治活動は、皆様のご支援によって支えられています。心温まるご支援をいただきまして、誠にありがとうございます。先月末、政治資金管理団体である「臥雲の会」の平成29年分の政治資金収支報告書を選挙管理委員会に提出いたしました。概要は以下の通りです。

◆収入総額 ¥7,294,492 ◆支出総額 ¥5,056,334 ◆繰越金額 ¥2,238,158
おかげさまで、4年間の政治活動の折り返し点を迎えることができました。引き続き松本に根を張り、皆様のご寄付を支えに、政治家として成長できるように全力で努力してまいります。今後とも、ご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

<取り扱い口座>

▽八十二銀行 松本営業部(普) 1342562

▽ゆうちょ銀行 ※臥雲の会より払込取扱票をお届けします。

臥雲の会 事務局
〒390-0811
長野県松本市中央1丁目2-24
電話 0263-36-7343
Fax 0263-50-6727
E-mail info@gaun-y.com

臥雲義尚

“1つの事例を作り、その小石が波紋を呼び、
成功事例がみんなの希望の光になる”
「孫正義氏 日経ビジネスインタビューより」

日々更新中 /

臥雲の日常と横顔



Facebook



1月～3月 主な投稿記事

- 1/ 4 年頭に想う松本城と市川量三
- 1/19 寒さ緩み氷彫フェスティバル a
- 1/21 小中学生向け入試改革説明会
- 1/26 寿小の空き教室で児童と遊ぶ b
- 2/ 9 松本城公園を考える連続講座
- 2/18 王者のレース小平奈緒に感涙
- 2/22 中核市制度で菅谷市長が熱弁
- 2/28 松大で障害者スポーツ交流会 c
- 3/10 球春到来 母校の選手層充実
- 3/20 三才山のイチゴ農家を訪ねる
- 3/21 カンボジアで稼働する「ガラ紡」
- 4/ 4 高遠城址公園「天下第一の桜」



a

冬夜の松本城公園。あすあさって開かれる氷彫フェスティバルの展示作品の制作が続く。幾分冷え込みが緩み、夜の気温は0度前後。あすの天気予報は、晴れです。コントラストの美しさが際立つ、氷彫に囲まれた松本城。松本の冬を代表する風物詩になる可能性を秘めています。



b

寿小学校の空き教室で、休み時間に子どもたちが地域の人たちと一緒に遊べる場所を作ろうという取り組みが始まりました。2時間目が終わった後の20分の休み時間、低学年を中心に100人近い児童が集まり、お手玉・コマ回し・輪投げなどで、近所の大人たちと夢中になって遊んでいました。「学校を地域に開放する。そして地域が学校になる」本版コミュニティスクールの、小さくても自由で確かな拠点になっていく可能性を感じます。



c

障がい者のスポーツ交流会「ワン・ハート まつもと」。普段は事業所で働く幅広い年代の障がいを持つ人たちが、健康インストラクターの寺平美樹さんや松本山雅のスタッフらと、カラダを動かしました。みんな楽しそうでした。健常者と一緒に気軽にスポーツを楽しめる環境を松本で増やすために何ができるのか、考えていきたいと思っています。



梓川地区で車座集会

2月15日に梓川地区で開催した車座集会には、30人余りの方々の参加をいただき、臥雲が松本の未来への思いを語り、皆さんと意見を交わしました。中学校の校歌にも謳われている梓川の清流と大地は、子どもを産み育てるに相応しいところ。医療・介護の充実はもとより、教育の質の向上を第一に取り組みたい。農と食、アルプスの景観といった山麓エリアならではの特色を生かした地域づくりに力を入れる。梓川地区をはじめ、それぞれの地域の実情に即した行政を展開していくために、市役所の人員・権限・予算を大胆に支所や地域づくりセンターに配分することが必要である。こうした考えを、皆さんの質問や意見に耳を傾けながら、お話しさせていただきました。



次代を
にたう 若者×臥雲

ジセダイと語る 松本のプライド

ジセダイトーク

臥雲のFacebookコメントより

これからの松本の教育を考えていく土台を提供してもらえたと思います。学習の量と質が上がり、東京圏との格差、家庭間の格差が広がる可能性が大きいと見込まれるだけに、学校と民間、学校と地域の垣根を低くして、すべての子どもに習熟度や興味に応じたきめ細かな学びの機会が与えられる仕組みを整えていくことが、ジセダイの目標の1つになります。

自分は移住者でなく転入者、この街に残っていたものを壊したくない、と語る菊地さん。松本の街と本が好きなたちに耳を傾けてもらいたい話で溢れていました。そんな彼が残念だと感じることで挙げたのは、大学生が街にいない、ということ。考え抜いて辿り着いた答えが、街の中に大学が欲しい、ということでした。う～ん、と唸られました。

そのユニークな発想とバイタリティに引き込まれました。農業とりわけ施設栽培には、工業的素養やマーケティング力が求められること。将来的には、地産地消ならぬ「地消地産」の仕組みを松本に創り上げること。近未来の松本の農業が、従来の農業の枠を超えて若い世代を惹きつける可能性があることを、実感できました。農業の使命は深い、です。

1/31

新たな学びで未来を拓く ～塾から見える教育改革～

第15回のゲストは、クルマの営業や海外への留学を経て、学習塾を運営している和久井悟さん。2020年から始まる「高大接続改革」をテーマに、思考力・判断力・表現力を養うことを目指す新たな教育の課題について、熱く語ってもらった。話術も巧みで聴衆を引き込む力があり、学校を社会に開いていく大切さを再認識する機会となった。



2/23

本と珈琲で楽しい街をつくる ～＜栞日＞が目指すもの～



第16回のゲストは、駅前大通りで古びたラジオ商会の看板を掲げて、「栞日」という書店兼喫茶店を営む菊地徹さん。暮らしたい街に店を持ちたいと27歳で松本を選び、本と珈琲の両方にこだわって若い人たちに新しい居場所を提供している菊地さんが目指すのは、本を生かした街づくり。「街を変える小さな店」となる可能性を秘めている。

3/27

未来の農業をクリエイトする ～高級イチゴから地産地産まで～

第17回のゲストは、三才山を拠点に先進的な手法で高級イチゴの栽培に取り組む柳澤直樹さん。アルバイトの遍歴を通じて身につけた技術や販売のノウハウ。「身土不二」という言葉に込める農業への思い。浅間温泉に温泉水と木材を利用した苺ハウスを造り、松本の食材を提供する拠点へと発展させようという試み。松本の農業に可能性を感じた。

